

本編⑩「儀法 vatta 犍度（小品第八：行儀作法）」2020.8.22

比丘（同士）の行儀作法についての「犍度（体系的にまとめたもの）」
の つづき

⑥森林比丘の儀法

そのとき、たくさんの比丘が森林に住んでいた。彼らは飲用水を整えず、用水を整えず、火を整えず、火を起こす木 *araṇi-sahita* を整えず、星座 *nakkhatta-padāni* を知らず、方角 *disā-bhāga* を知らなかった。盗賊たちがその住処に来て、「尊師たちよ、飲用水はあるか？」「ない、友よ」……「今日は何日か *kena ajja bhante yuttam?*」（月の満ち欠けによる一月内の何日の意味と、星座との兼ね合いで一年の何日かの意味と両方。）「知らぬ」「こちらはどの方角か？」「知らぬ」。

盗賊たちは「(必要なものごとを) 持たず知らぬこの者どもは賊にして比丘に非ず」と言い捨てて去った。その比丘たちは別の比丘たちに、別の比丘たちが釈尊に報告。(今回は説法はなく……)

「では、森林比丘たちが遂行すべき *vattitabbam* (儀法の動詞形) 儀法を制定します (知らしめます) *vattam paññāpessāmi*」。

儀法の制定はいつもこの言い方。命令ではなくやるべき仕事という感じ。

○

比丘たちよ、森林比丘は早朝に起き、鉢を袋 *thavikā* で包んで肩 *aṃsa* に掛け(平地ではない処があるからか?)、大衣を肩に乗せ *khandhe karitvā*、草履 *upāhanā* を履き、木具、土具を納め、戸と窓を閉じて臥座処を出るべし。

村に入る (なんとなく村の標識がある。現代の「下松市」のような) ときは、草履を脱ぎ、下に置いて、打ち (埃を払って)、袋に入れて肩に掛け、

(以下、托鉢なので前回の托鉢の儀法と同じ)

三輪 *timaṇḍala* (へそと両ひざ) を覆い、下衣を巻き付け、帯 *kāyabandhana* を締め、大衣を畳んで紐で縛って、鉢を洗って携え、よく慌てずに村 *gāma* に入るべし。

よく身を覆って屋内 *antaraghara* を行くべし。よく身を制御して *saṃvuta* 屋内に行くべし。眼を下に向けて *okkhittacakkhunā* 屋内に行くべし。(衣?眼?を) 上げずに *na ukkhittakāya* 屋内に行くべし。

笑いながら屋内に行くべからず。大声で……身体を揺らして……肘を揺らして……頭を揺らして……腰に手を当てて *khambhakatena*……頭を覆って……屈んで *ukkuṭikāya* 屋内に行くべからず。

民家に入るときは観察すべし、「ここから入り、ここから出る」と。あまりに急に *atisahasā* [民家に] 入るべからず。あまりに急に出るべからず。甚だしく遠くに立つべからず。甚だしく近くに立つべからず。とても長い時間立つべからず。とても短時間で去るべからず。

立って、[その家の人]が] 托鉢食を与えようとしているか与えようとしていないかを観察すべし。もし [その家の人]が] 用事を措き *kammam nikkhipati*、座より立ち、匙を拭き *kaṭacchum parāmasati*、器を *bhājanam* 拭き、あるいは置いた *ṭhabeti* ら、与えようとしているようだと思つて立ち留まるべし。

食を受けるときは、左手で *vāmena hatthena* 大衣を持ち上げ *saṅghāṭim uccāretvā*、右 *dakkhiṇena* 手で鉢を差し出し *paṇāmetvā*、両手に鉢を持って食を受けるべし。施食者の顔を見るべからず。

副菜 *sūpa* を与えようとしているか与えようとしていないかを観察すべし。もし匙を拭き *kaṭacchum parāmasati*、器を *bhājanam* 拭き、あるいは置いた *ṭhabeti* ら、与えようとしているようだと思つて立ち留まるべし。

食を受けたら、大衣で鉢を覆い、慌てず立ち去るべし。

よく身を覆つて屋内に行くべし。よく身を制御して屋内に行くべし。眼を下に向けて屋内に行くべし。(衣?眼?)を) 上げずに屋内に行くべし。

笑いながら屋内に行くべからず。大声で……身体を揺らして……肘を揺らして……頭を揺らして……腰に手を当てて……頭を覆つて……屈んで屋内に行くべからず。

(以上、⑤托鉢の儀法と同じ)

村から出るときは、鉢を袋 *thavikā* で包んで肩 *aṃsa* に掛け、大衣を畳んで *saṃharitvā* 頭に乗せ *sīse karitvā* (行きか帰りか外部の者に分からせるため? 帰りは日が高いので頭に?)、草履 *upāhanā* を履いて行くべし。

比丘たちよ、森林比丘は飲用水を整うべし。用水を整うべし。火を整うべし。火付け木を整うべし。杖を整うべし。総じて *sakalāni*、もしくは一部 *ekadesāni*、星座を学ぶべし *uggahetabba*。方角に詳しくなるべし *disā-kusalena bhavitabba*。

以上が森林比丘の儀法である。

参考：『中部』69「ゴーリヤーニ経」、『サンジャパ』18「村の僧と森の僧」藤本晃

⑦臥座具の儀法

あるとき、たくさんの比丘が露地 *ajjhokāsa* [*adhi-okāsa*] で衣を作っているとき、六群比丘が風上 *paṭivāta* の空き地 *aṅgaṇa* で臥座具をはたい *pappoṭheti* て、比丘たちが塵で汚れた。少欲の比丘たちがイライラ……釈尊に報告。「真実か?」「真実です」呵責して説法して比丘たちに告げる。

「臥座具の儀法を制定します」。

○（客比丘が精舎に最初に入るとき儀法とほぼ同じ）

もし、（自分が）住んでいる精舎（部屋）が汚れ *uklāpa*[*ukkalāpa*]（無人 [空っぽ]）たら、できれば掃除すべし。掃除するときは、まず、鉢と大衣を取り出して、一方に置くべし。座具の敷物を出して、一方に置くべし。シーツと枕を出して、一方に置くべし。床（とこ）を低くして上手に扉の枠に擦らないように当てないように出して一方に置く。椅子を低くして上手に……。床の脚を出して……。痰壺を出して……。もたれ板を出して……。地面の敷き具を、敷かれていたところを観察して、出して一方に置く。

もし精舎に蜘蛛の巣があるなら、よく確認してそれから取り除くべし。窓枠を拭くべし。赤土で塗った壁が汚れていたら、布を濡らして絞って拭くべし。黒色の地面が汚れていたら、……。何もしていない地面ならば、水を撒いて掃除し、精舎が塵で汚れないようにすべし。塵を集めて一方に捨てるべし。

比丘の周囲で臥座具をはたいてはならない。精舎の周囲で……。飲用水の周囲で……。用水の周囲で……。風上の空き地で……。風下 *adhovāta* で臥座具をはたくべし。

地面の敷き具を乾かし、清め、打ち、運び入れ、元のおりに敷くべし。床の脚を乾かし、払い、運び入れ……。床を乾かし、清め、打ち、低くして上手に扉の枠に擦らないように……。椅子を乾かし、清め……。シーツと枕を……。座具の敷き物を……。痰壺を乾かし、拭い……。もたれ板を乾かし、払い……。

〈自分の物を置く〉

鉢と大衣を納めるべし。鉢を納めるときは一方の手で鉢を取り、もう一方の手で床の下あるいは椅子の下を触ってから納めるべし。何もない処 *anantarāhita*（露地）に置いてはいけません（落し物のよう）。大衣を納めるときは一方の手で大衣を取り、もう一方の手で衣架 (*cīvaravaṃsa* 竹製) あるいは衣縄 (*cīvararajju*) をこすってから *pamajjitvā*、端を外側に中をこちら側にして大衣を納めるべし。

〈自分の物を置く〉

鉢と大衣を納めるべし。鉢を納めるときは一方の手で鉢を取り、もう一方の手で床の下あるいは椅子の下を触ってから納めるべし。何もない処 *anantarāhita*（露地）に置いてはいけません（落し物のよう）。大衣を納めるときは一方の手で大衣を取り、もう一方の手で衣架 (*cīvaravaṃsa* 竹製) あるいは衣縄 (*cīvararajju*) をこすってから *pamajjitvā*、端を外側に中をこちら側にして大衣を納めるべし。

〈日常の保全〉

もし東から塵風が吹いたら東の窓を閉じるべし。西、北、南……。寒いときは昼に窓を開け夜に閉じるべし。暑いときは昼に窓を閉じ夜に開けるべし。

室 pariveṇa が汚れたら掃除すべし。門屋 koṭṭhaka……講堂……火屋 aggisālā……
 ……厠 vaccakuṭi……。飲み水が無ければ補充すべし。用水が無ければ補充すべし。
 洗濯甕に水が無ければ水を灌ぐべし。

〈ここから新しい部分〉

年長 vuḍḍha 比丘と同じ精舎（部屋）に住んでいるなら、年長者の許可を得ず
 に an-āpucchā、説示 uddesa（経でも戒でも）を与えるべからず。……質問するべ
 からず。……読誦 sajjhāya すべからず。……法を説くべからず。……灯火を灯す
 べからず。……灯火を消すべからず。……窓を開けるべからず……窓を閉じる
 べからず。年長比丘と一緒に同じ経行処で経行する ekacaṅkame caṅkamati ならば、
 年長者に随っておこなうべし parivattitabba。大衣の角（で年長者を）衝いてはな
 らない Saṅghāṭi-kaṇṇa。

以上が臥座具の儀法なり。

⑧サウナの儀法

あるとき、六群比丘はサウナ jantāghara[=jentāka, *jhānta-āgāra]で長老比丘たち
 に遮られ nivāriyamānā、恭敬の気持ちがないので anādariyaṃ paṭicca たくさんの
 薪を積み、火を点け、戸を閉じ、戸口に座った。比丘たちは熱気に苦しみ、戸
 口が開かず、気絶して倒れた mucchitā papatanti。少欲の比丘たちがイライラ……
 「真実か」「真実です」。呵責して説法して比丘たちに告げた。

「比丘たちよ、サウナで長老比丘たちに遮られ、恭敬の気持ちがなくたくさん
 の薪を積み火を点けるべからず。点ける者は悪作に墮す āpatti dukkaṭassa。比丘
 たちよ、戸を閉じ、戸口に座るべからず。座る者は悪作に墮す」。

（悪作は具足戒の罰則の一つ。一番軽い。六群比丘が出家した頃には戒律が幾つもでき
 ていたよう。彼らが戒律が制定される原因の一つでもある。）

○

比丘たちよ、では、サウナの儀法を制定します。先にサウナに行く者は、も
 し灰 chārikā が多ければ灰を捨てるべし。もしサウナが塵で汚れていたらサウナ
 を掃除すべし。もし漆喰の床 paribhaṇḍa が塵で汚れていたら漆喰の床を掃除す
 べし。もし室内 pariveṇa が……もし建屋 koṭṭhaka が……もしサウナ堂 jantāghara-
 sālā が……掃除すべし。

「砕かれた＝塗り粉 cuṇṇa」をこねるべし sannetabba。粘土 mattikā を湿らすべ
 し temetabbā。水を入れる木桶 udakadoṇikā に水を灌ぐべし。

サウナに入るには、粘土を面に塗り前と後ろを purato ca pacchato ca 覆ってサ
 ウナに入るべし。長老比丘を押して anupakhajja 坐るべからず。新参比丘を座よ

り拒むべ **paṭibāhitabbā** からず。できれば、サウナで長老比丘たちに奉侍すべし **parikammam kātbbam**。

サウナを出るには、サウナの腰掛 **pīṭha** を持って前と後ろを覆ってサウナを出るべし。

できれば、(身体を冷やし汗と膏を流すための) 水中でも長老比丘たちに奉侍すべし。長老比丘たちの前で浴すべからず。上流で **uparito** 浴すべからず。浴して上がろうとする者 **uttaranta** は入る者 **otaranta** に道を譲るべし。

後からサウナを出る者は、もしサウナに泥に濡れた処 **cikkhalla** があれば洗うべし。粘土の木桶を洗い、サウナの腰掛を納め、火を消し、戸を閉じて去るべし。

比丘たちよ、以上がサウナの儀法です。